2021 年11月7日　召天者記念礼拝（降誕前第7主日礼拝）メッセージ

「いのちの神とともに生きる」　　牛田匡牧師

聖書　マルコによる福音書　12章　18−27 節

今日は先に天に召された方々を記念する「召天者記念礼拝」です。以前は「永眠者記念礼拝」と呼んでいましたが、「永眠」というと、「長い眠り」と言うよりも、二度と目覚めない「永遠の眠り」のように感じてしまいますので、「召天者」という方が相応しいかと思い、昨年から呼び方を変えました。「記念する」という言葉も、改めてどういう意味かと考えてみますと、読んで字の如く「記して念(おも)う」ですから、「思い出して心に覚える」ということです。週報の中には私たちのこの教会に関係する「召天者の方々」のお名前を掲載しています。私にとってはこの 18 人の方々は、お会いしたことのない方々ですが、こうしてお写真で眺めたり、墓地に収められているお骨に対面したり、教会の皆様とのお話の中で、時折、名前が聞かれたりする、そのような方々です。

とりわけ昨年までは、召天日が分からなかったトーヤ宣教師夫妻について、お二人の召天日だけが空欄なのも寂しいので、改めて過去の資料を探したり、インターネットで調べたりして、知ることができました。それぞれの方が、いつ、どこで生まれ、どのように育ち、誰と出会い、そしてどのような思いを持って、その生涯を送られたか。そして、いつ天に召されていったか。そのような一つ一つのことが、分かっていくと、それまでお名前を聞いたことしかなく、遠い存在だった方々が、より身近な存在になったような気がします。今までは知らなかったことを、知っていくにつれて、その方の存在が身近なもの、意味のあるものに変わっていく……。それが「記念する」ということなのではないかと思います。

日本語では、人が死ぬことを「亡くなる」と言ったり、「逝(ゆ)く（往く）」と言ったりしますが、それぞれ「ない」の反対語は「ある」で、「いく」の反対語は「くる」です。こっちに来たものが、あっちに行った。ここにあったものが、なくなった。そのような感覚なのでしょう。では「死ぬ」の反対語は何でしょうか。「生き死に」という言葉があるように、「死ぬ」の反対言葉は「生きる」だと思いますが、その元々の大和言葉の語源は、植物が瑞々(みずみず)しく「いきいき」しているか、水気が足りなくて「しなしな」になっているか、という言葉なのだそうです。つまり、言い換えると「ある」か「ない」かと

いう「0か1か」ではなく、今ここに、確かにある命、かつてあった存在が、自分にとって、また隣人にとって「しなしな」になっているか、それとも「いきいき」しているかということこそが問題なのだ、ということなのでしょう。

今日、ここに写真を並べたり、お名前を掲示させて頂いたりした方々は、私たちが出会ったごくごく一部の方々でしかありません。ここに名前を連ねていない方々も、たくさんおられます。しかし、だからといって、それらの方々の存在が「なかった」わけではありません。多くの方々との出会いを通して、私たちは今日ここまで歩んでくることが出来ました。その中で出会った一人一人の方々を、改めて思い出す時、それらの命は、それぞれに私たちの中で「しなしな」ではなく、再び「いきいき」と輝き出していくのではないでしょうか。

さて、今回の聖書のお話は、聖書協会共同訳では「復活についての問答」という小見出しが付けられている個所でした。この「マルコによる福音書」だけではなく、「マタイによる福音書」にも「ルカによる福音書」にも、それぞれ記されているお話ですし、内容からしても、確かに歴史のイエス様がそのように言いそうな、実際にあったお話なのだと思います。「死者の復活なんてない」と言っているサドカイ派の人々が、イエス様のところに来て尋ねた、というところから、話は始まっています。このサドカイ派というのは、今から 2000 年前の当時にあったパレスチナのユダヤ教の一派でした。エルサレム神殿の祭司・貴族階級の人たちとつながっていたと考えられていますが、各地の村々にいて人々に律法を教えていた律法学者、ファリサイ派とは仲が悪く、律法、ヘブライ語聖書の理解をめぐって、対立していたようです。その論点の一つがこの「復活について」、「死者の復活はあるかないか」ということでした。

そのために彼らは聖書の言葉をたくさん引用して、屁理屈を言ってきます。19 節に引用されている「ある人の兄が死に、妻を残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄のために子をもうけねばならない」（申命記 25:5）というのは、「レビラート婚」と呼ばれる婚姻関係の法律です。古代のユダヤにおいては、跡継ぎがいないということは祝福が途絶えてしまうことと受けとめられていましたので、死んだ男性の家系が途絶えないように、その弟が未亡人をめとり、子どもをもうけなければならない、という法律でした。彼らはこの法律に基づいて、イエス様に対して、次のように問いかけました。20 節からです。「さて、七人の兄弟がいました。長

男は妻を迎えましたが、子を残さないで死にました。次男が彼女を妻にしましたが、子を残さないで死に、三男も同様でした。こうして、七人とも子を残しませんでした。最後にその女も死にました。復活の時、彼らが復活すると、彼女は誰の妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」

実際には、こんなことはなかったでしょう。議論の中で相手の揚げ足を取ろうとするための、机上の空論です。ですから、イエス様も「あなたがたは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか」（24）と、呆(あき)れて言い返されました。「論語読みの論語知らず」ということわざのように、「聖書読みの聖書知らず」ということでしょう。続けて 25 節では「死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天のみ使いのようになるのだ」と言われています。これだけを読むと、「なるほど天国では、みんな天使みたいになるから、婚姻関係も関係なくなるんですね」と思いたくなりますが、よくよく考えてみると、分かるような分からないような、よく分からない表現です。そもそも「天のみ使い」と言われてもよく分かりませんし、婚姻関係も関係なくなると言われたら、じゃあ親子関係も関係なくなってしまうのでしょうか。そうなると、天国で再会したいと思っているあの人とも会えないかもしれない、でも逆に、もう二度と会いたくないと思っている人とも、再会してしまうかもしれない……。そのように考え出すと、収拾がつかなくなってしまいます。

しかし、この「レビラート婚」という法律自体からも分かるように、当時の古代ユダヤ社会における結婚、婚姻関係では、女性は男性の財産、所有物であり、その財産を相続させるための子どもをもうけることが目的とされた、いわば道具のような存在とされていました。すべての命を創られた神様が、互いに唯一無二の人格として創られた一人一人の魂に向かい合うパートナー（創世記 2：20）としての存在としては、理解されていなかったわけです。ですから、天の国ではそのような一切のしがらみから解放されて、本来の命、魂、一人の人格そのものとして、再び活き活きと生きることができるようになるのだ、ということなのではないでしょうか。

26 節以降の言葉も、不思議です。「出エジプト記」の 3 章、いわゆる「モーセの召命」、モーセが神様と出会い、エジプトからイスラエルの民を導き出すように召し出された物語に言及して、イエス様は「神がモーセにどのように言われたか、読んだことがないのか。『私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか」と言われました。アブラハムもイサクもヤコブも、モーセの時代には、

彼らは当然すでに亡くなっていましたが、その神はモーセの時代にも、確かに生きているのだ、ということを語りたかったのでしょうか。しかし、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主なる神」という表現は、ヘブライ語聖書の中で何度も登場する定型表現です。それはイスラエル民族の父祖とされる彼らから今まで、連綿と歴史の中を生き続けて来ている神とも理解できますし、またアブラハムにとっても、その子イサクにとっても、その孫であるヤコブにとっても同じ神であるように、私たちにとっても、すべての生きとし生ける者にとっての神、命の源である生ける神とも理解することが出来るのではないかと思います。それゆえに最後の「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」（27）という言葉になるのではないでしょうか。

今日ははじめに「召天者記念礼拝」ということで、命の源、すべての命の創り主であり、与え主である神さまの御許（みもと）に帰っていった、「天に召された方々」を記念する礼拝だと言いました。すると、その神様の御許から、この地上に生まれてきた、今ここに生きている私たちは「天から遣わされてきた者たち」である、と言えるのではないでしょうか。25 節には「天のみ使いになる」と書かれていますので、それだけ読むと、いかにも光り輝いて背中に羽の生えた天使になるかのように読めてしまうかもしれませんが、もともとの言葉は「天にいるみ使い、使者」という言葉です。そして、私たちもまた命の源である神さまの御許からこの地上に、それぞれの使命を持って送られた天から遣わされた者たちです。

今日は、この後、イエス様の死と生を記念して、改めて思い返す「ユーカリスト」「聖餐」の時を持ちます。パンとぶどう酒を通して、イエス様の生き様と死に様を思い起こし、私たちも確かにそこにつながり、共に生き、共に復活する生き方へと導かれ歩み出していきます。しかし、たとえユーカリストがなくても、毎週の礼拝を通してでも、私たちは命の神の原点に立ち返ることができます。さらに言えば、様々な事情から、この礼拝に連なることができなくても、今、それぞれの人が与えられた命を生きているということ、それ自体が「いのちの神と共に生きている」ことに他なりません。生きている時も、死の時も、死を越えた生においても、この地上に遣われている間も、天に召された時も、いつでも神様は共におられます。「いのちの神とともに生きる」……。先に天に召された多くの方々のことを思い出し、偲びつつ、共に歩む時間を与えられた恵みに感謝して、私たちは今日もここから遣わされ、歩み出していきます。